

# モンゴルの子供に運動靴を

## 阪神大震災きっかけ 兵庫の2人430足寄贈

有吉社長が経営するラッキーベルが不足した神戸市内の学供。震災以前にも、長崎やモンゴル、アフリカなどの外国にも運動靴を寄贈してきた。



市山さんはモンゴルを訪れた際、物資不足のため、ほとんどの子供がはだだだったため、日本で靴を提供してくれる団体を探していたところ、同社から、児童らの足のサイズに合わせた運動靴約430足を寄贈される運動靴を手にする有吉社長。「子供たちに喜んでもらえたら何より」と話している。神戸市長田区

有吉社長も「震災から生き残り、商売も順調に進められていることへの感謝の気持ちが強くなった。子供たちが喜んでくれたら何より」と話している。

阪神大震災で、母を失った市民団体代表の男性と、本社が全壊した運動靴メーカー社長の男性が、物資の不足によりはだだでの生活を余儀なくされているモンゴルの子供たちに運動靴約四百三十足をプレゼントする。二人は震災をきっかけに設立された兵庫県西宮市のモンゴル人奨学支援の会「AMOS(アモス)」の代表、市山時彦さん(左)と、神戸市長田区の運動靴メーカー「ラッキーベル」の有吉英二社長(右)。

神戸市兵庫区に住んでいた市山さんの母が当時亡く、シヨックを受けた市山さんはモンゴルへ旅立ち、現地の人たちから励まされたことがきっかけとなり、平成十二年、モンゴル人留学生を支援する同団体を設立。毎年一回、モンゴルや中国・内モンゴル自治区を訪れ、文房具などを現地の子供たちに寄贈する活動も続けている。

社長(右)。

新型肺炎(SARS)の影響でモンゴルに行つて、子供たちに直接靴を渡すことはできず、船便などでの輸送となるが、市山さんは「運動靴を通して、つらい震災を乗り越えた強い気持ちで、モンゴルの子供たちに伝われば」。